旧石器の型式カタログ (1)¹⁾

赤 沢 威²⁾

Catalogue of Palaeolithic Artifacts (1)¹⁾

Takeru AKAZAWA²⁾

1949 年におこなわれた群馬県岩宿遺跡の調査によって、旧石器文化の存在がわが国でもうらづけられた。それ以来各地で数多くの遺跡が調査され、それとともにわが国の旧石器文化に関する知見は著しく豊富となり、今では、日本人とその文化の起源が洪積世にまでさかのぼることは周知の事実となっている。しかし、その最初の日本人がどこから渡来したのか、彼らがその後周辺諸民族とどのような関係をもっていたのかなどの問題ははっきりしない。この種の問題は、古人骨や動物化石の分布、系統などを調べることによって検討できる。ただ、わが国の旧石器遺跡はその種の標本に比較めぐまれていないため、石器にもとづく研究が重視されている。

ところで、石器の起源や系統などを調べる際には、関連する対比標本が相互に類似した基準のもとに分類、記載されていることが望ましい。例えば、フランスの先史考古学者、F. Bordes らがヨーロッパの旧石器のために考案した分類法は、その後多くの研究者によって利用されている。そのため、ヨーロッパ、中近東、アフリカにかけて発見される数多くの標本が Bordes らの分類法によって記載されることが多い。これは、標本間の比較研究を容易にし、文化の起源、系統などを一定の基準のもとに分析することを可能にするという大きな利点をもつ。

さて、わが国の旧石器研究をふりかえると、その歴史が浅いこともあり、分類の原則や命名法に関して十分な検討が加えられていない。ところが一方では、近年数多くの遺跡が調査され、莫大な量の旧石器が発見され、記載されている。それに応じて、研究者の興味も、時代的、地域的に限られた問題から、多量の資料を駆使し総合的な判断を要する分野へと変化している。しかし、日本考古学のこのような傾向が将来とも混乱なく育つために

は、やはり、標本の分類法、記載法などについて研究者の間に共通した認識が必要だと考えられる。そこで、今回から本誌を用いて、日本旧石器の分類法を検討することを目的とした若干の基礎的作業をはじめたいと思う。

この種の研究に対してはいくつかの方法が考えられる。例えば、日本旧石器の既存標本を分析し、それに合致した分類法を考案するのも 1 つの方法である。ところが、わが国の旧石器に関する既存研究を概観すると、すでに諸外国、特にヨーロッパの研究結果が、標本の分類基準、命名法に大幅に利用されていることがわかる。そこで、われわれの研究に影響を与えている諸外国の分類法の特徴を調べ、それが、わが国の旧石器の研究にどの程度適合するかを検討してみるという方法も考えられる。それによって、日本以外の地の標本にもとづいて定義された用語が、わが国の石器の名称として適当であるかどうかを知る手掛りもえられるであろう。旧石器の研究はヨーロッパで興り、その影響は汎世界的である。それがわが国の旧石器研究にも有効であるとすれば、それにそった研究もまた十分な意味をもつといえよう。

さて、実際の研究法は、まずわが国の研究者が比較的頻繁に用いている外来石器用語を選び、それが本来どのような石器型式に対して用いられてきたかを調べることにする。その際に、現在わが国の研究機関、博物館等が所蔵する標本の中から、当該型式の特徴を最もよく反映する標本を選び、それを参考標本と名づけ、その記載を通して当該用語を解説することにする。これは、いうまでもなく、その標本が、必要に応じて、わが国の研究者によって利用、研究されることを意図している。

今回は始める作業は、本号から第 20 巻第 4 号 (特集号を除く) まで 7 回の連載となる。そこで、記載法を以下のように統一することにする。尚特殊な先史学用語、引用文献は最後に一括して記載する予定である。

1) 1979 年 9 月 25 日受付

2) 東京大学総合研究資料館 The University Museum, The University of Tokyo.

石器型式名

先史学の分野では、生物学における学名に相当する用語は使用されない。石器は各母国語で表現される。ところが、名称は同一国においても非常に不統一であり、同一の石器が異なって表現されることが多い。そのような異なる表現法を網羅することは不可能である。そこで、各石器型式の名称として、日本語、英語、仏語、独語から代表的と思われる同義語を選び並記する。そして各石器型式の特徴を下記の順序で説明する。

1. 参考標本

わが国で利用できる標本の中から、当該型式の参考標本を選び、それを以下の順序で記載する。

(1) 標本番号

参考標本の登録番号である。今回利用する標本は、すべて東京大学総合研究資料館所蔵品であり、当館の登録システムに従って表記する。

(2) 採集遺跡

参考標本が採集された遺跡名を示し、同様に遺跡の地理的位置、その形態上の特徴を概略する。

(3) 採集遺跡の研究史

(4) 採集地点

参考標本が採集された地点等、実際に採集された状況を記載する。今回扱う標本の多くは表面採集品であるが、例えば発掘によって採取されたものであれば、その出土状態を記載する。

(5) 採集者

参考標本を採集した研究者、研究組織および研究機関名などを並記する。

(6) 記載

参考標本が記載されている場合に、その報告者、文献名を記す。それ以外に当該標本を利用した研究が存在する場合には、つづけて研究者、論文名を並記する。

2. 参考標本の形態学的記載

参考標本の特徴を以下の3項にわけて順次記載する。

(1) 形態学的特徴

(2) 測定値

石核石器と石核は Fig. 1, 剥片石器は Fig. 2 に示す計測値 (mm) と重量 (g) である。

(3) 石質

3. 参考標本の年代

参考標本が占める地質年代、文化年代を記載する。た

Fig. 1 石核石器と石核の計測部位 ($B = \frac{1}{2}A$, D は最大幅) BORDES, 1961: Fig. 5. 呼称改変).

Fig. 2 剥片石器の計測部位 (a は最大長, C は剥片剥離軸長).

だ、今回扱う標本の多くは表面採集品であるため、その年代を正確に検討できない例が多い。その場合には、参考標本と型式学的に近似する既存の遺跡資料の年代的所見を参考値として記載する。

(1) 地質年代

(2) 文化年代

参考標本をともなったインダストリー名とその編年上の位置を記載する。

(3) 絶対年代

参考標本を出土した堆積物を試料として絶対年代が測定されている場合は明記する。それ以外の場合には、当

該標本と型式学的に類似した標本をとまう遺跡の測定結果を参考値として示す。

4. 関連標本

同一型式に分類される石器といえども、その形態学的特徴は変異に富むのが普通である。そのような変異は、同一遺跡の同一層位の石器間でも認められる。さらに同一型式と推定される石器が時代を隔てて発見されることもある。そこで、最後に、参考標本と形態学的に類似する標本を抽出し、各石器型式の一般的な変異を示すことにする。尚、この項で利用される標本の番号も、参考標本の場合と同様の意味を持つ。

ハンド・アックス

(Hand-axe, Biface, Faustkeil)

1-(1) 標本番号 LA-1 (Plate I)

1-(2) 採集遺跡 ラタムネ (Latamne) 遺跡。当遺跡はシリア唯一の貿易港、ラタキア (Lattakia) 近郊で地中海に流出するオロンテス (Orontes) 河の中流域に位置する。オロンテス河の中流域にあるシリア第3の都市、ハマ (Hama) の39 km 下流、右岸にラタムネという小部落がある。当遺跡は、当部落の近郊に位置する。

1-(3) 採集遺跡の研究史 当遺跡は、W. J. van LIERE (1960) によって1960年に発見された。彼は、P. J. R. MODDERMANN とともに、1962年に小規模な発掘をおこなっている (van LIERE, 1960, 1960—61; HOOIJER, 1962; van LIERE and HOOIJER, 1961)。次いで1964、1965年の2シーズンにわたった J. Desmond CLARK (1966 a, b, c, 1969) が組織的な調査をおこない、一躍西アジアを代表する洪積世遺跡となった。また1977年には、自然地理学者 J. BESANÇON, P. SANLAVILLE と先史学者 L. COPELAND, F. HOURS によってオロンテス河一帯の地形と洪積世文化との相関に関する総合調査がおこなわれ、その際当遺跡一帯の調査が集中的におこなわれた (BESANÇON *et al.*, 1978)。

1-(4) 採集地点 表面採集品。東京大学 西アジア 洪積世遺跡調査団 (以後 TUSEWA) は、1967年に、主としてシリア、レバノン、ヨルダン一帯で洪積世遺跡を発見するため組織的な踏査調査をおこなった。それに関連して、ラタムネ遺跡を調査する機会を得、同時に若干の標本を採集した。標本は、すべて表面採集品であり、遺跡周辺のワディ (wadi) 底、van LIERE, Desmond CLARK ら

の発掘溝から崩落したと推定される礫層中から発見されたものである。

1-(5) 採集者 赤沢威・遠藤万里, TUSEWA, 東京大学

1-(6) 記載 ——

2-(1) 形態学的特徴 素材として円礫が利用されている石器である。円礫の表面をおおう原石表皮が、block-on-block 法あるいはハンマー・ストンを用いた直接打撃法によってはがし取られ、その両側に一端に向かって次第に狭小となる刃部と、その延長上に尖鋭な刃部とが作られている。成形技術は比較的粗雑で、剝離された部位が深くえぐれた状態を示し、そのため両側の刃部はジグザグ状に走る。そして、尖端部の他端は、ほとんど成形されていないため、広い範囲にわたって原石の表皮をとどめており、部厚くずんぐりしている。

2-(2) 測定値 A. 160, B. 80, C. 30, D. 85, E. 67, F. 71; 重量 677。

2-(3) 石質 フリント

3-(1) 地質年代 当標本は表面採集品であるが、その形態学的特徴は、CLARK が発掘によって得た標本と類似する。彼は、当遺跡で、石器等の遺物の分布状態にもとづいて当時の生活面 (occupation floor) をあきらかにし、それは、ヨーロッパ氷期編年のミンデル氷期の終末か、ミンデル・リス間氷期の初頭に形成されたものだと考えた (CLARK, 1966)。また BESANÇON *et al.* (1978) も CLARK の見解をほぼ支持し、その生活面は、オロンテス河の河成層の中で、ミンデル氷期に形成されたラタムネ層 (Latamne Formation) の最上部に位置すると記載している。

3-(2) 文化年代 CLARK (1966) は、ラタムネ遺跡の発掘品を前期旧石器文化に属し、その中の中期更新世 (Middle Pleistocene) に位置するアシュール・インダストリー (Acheulean industry) として報告した。ただ、アシュール・インダストリーは、さらに、前期、中期、後期に細分されるのが普通で、CLARK (1966 a, b, c) もその後の記載では中期アシュール・インダストリーの前半 (Early Middle Acheulean) と分類し、BESANÇON *et al.* (1978) はただ中期アシュール・インダストリーと分類し、記載している。この中期アシュール・インダストリーはミンデル氷期の終末期にあられ、リス氷期の開始期項に、より進歩した後期アシュール・インダストリー (Late Acheulean) と交代すると考えられている (BESANÇON *et al.*, 1972)。

3-(3) 絶対年代 ラタムネ遺跡の年代は、 ^{14}C 法の測定範囲を越え、また地層中に火山性堆積物が含まれてい

ないために K-Ar 法などによる測定も期待できない (CLARK, 1969: 36). また、西アジアでは、いまだ中期アシュールエアン・インダストリーをともなった地層の試料を用いた測定値がない。ただ、ラタムネ遺跡の南約 350 km, ガリレー (Galilee) 湖の南岸にあるウベイディア (Ubeidiya) 遺跡の測定値が参考となる。当遺跡の生活面はウベイディア層 (Ubeidiya Formation) にある。ウベイディア層の下部はギュンツ氷期に対比される可能性もあるが (HOROWITZ, 1968), その上部, すなわちウベイディア遺跡の生活面が発見された部分は、ラタムネ層と同じく、ミンデル氷期に対比される可能性が高い。そして、ウベイディア層上部に対比される玄武岩の K-Ar 法測定値 ($640,000 \pm 120,000$, $680,000 \pm 50,000$ B. P.) によって、その形成年代が 640,000 年前を下ることはないであろうと報告されている (HOROWITZ *et al.*, 1973). ただ、当遺跡の生活面は層位的にラタムネ遺跡のそれよりかなり古く、かつインダストリーは前期アシュレ

アンと記載されているので (BAR-YOSEF & TCHERNOV, 1972), ラタムネ遺跡の中期アシュールエアンはそれよりかなり新しいことになるであろう。

4. 関連資料 ハンド・アックスは、ほぼ三角形の輪郭をもち、一端は幅広で部厚くずんぐりしており、他端にあつては次第に狭小となり最後は比較的鋭く尖るという一般の形態を示す。その中で、中期アシュールエアンのハンド・アックスは、尖端部の他端に原石の表皮をとどめている例が多い (Plate II). これは、成形技術の未熟さの一つのあらわれである。また、成形技術に block-on-block 法が利用されているため、表皮などのはがされた跡が深くえぐれた状態を示し、石器表面がはなはだしい凹凸を示し、かつまた両側刃部がジグザグ状となる。また、この時代の標本は非常に古く、しかもしばしば礫層堆積物にまざって発見されるため、その表面が著しく磨滅している例がある (Plate II; Fig. 2).

中期アシュールアン・インダストリーのハンド・アックスの参考標本 (LA-1) (Scale ca. 2/3)

Plate II

中期アシュレーアン・インダストリーのハンド・アックス関連標本 (Scale ca. 1/2).

1. LA-2, 2. KH-1, 3. LA-4, 4. LA-3.